

今週の
もう1冊

実在の金融マンを軸に
平成の忘れ物を描く

評者・上智大学准教授 中里透



失われた時、盗まれた国

ある金融マンを通して見た
〈平成30年戦争〉

増田幸弘 著

作品社
2640円 272ページ

Profile

ますた・ゆきひろ

1963年生まれ。早稲田大学第一文学部卒業。フリーランスの記者、編集者。スロヴァキア在住。主な著作に『プラハのシュタイナー学校』『東国ノススメ』『黒いチェコ』『不自由な自由 自由な不自由』。共編訳書に『独裁者のブーツ』。

い学校に行つて、いい会社に入れば、いい暮らしができる——。そんなことを素直に信じられる時代があった。

本書はそんな昭和の時代に生まれ育ち、都市銀行に入った1人の金融マンが、思うところあつて為替プロカーに転じ、バブル崩壊と情報化の波に翻弄されながら、新たな展開を求めて香港に移り住むまでの軌跡を描いている。

この物語の主人公は笹子善充。外為どつとコムの事実上の創業社長だ。東京の近郊、埼玉県所沢市の団地に育つた笹子は、地元の国立大学を卒業して都市銀行に就職する。期待を胸に入行した笹子を待ち受けていたのは、前例を踏襲し、年功を重んじ、変化を好まない、保守的な銀行の慣行と姿勢であつた。

を抱いた笹子は銀行を辞め、為替プロカーに転じる。

だが、仕事が軌道に乗りかけた頃、バブルがはじけ、金融業界は冬の時代を迎えた。

外国為替の取引にはもう一つ大きな波が押し寄せた。取引の電子化だ。電子プロキングが広がれば、売り注文と買い注文をつなぐ為替プロカーは不要になる。

こうした中、起死回生の策として笹子が取り組んだのがFX（外国為替証拠金取引）事業の立ち上げだ。事業が順調に拡大し、さあ上場という矢先、笹子は社内であらぬ噂を立てられて会社を追われ、香港に新天地を求める。

本書に描かれているのは1人の金融マンの姿であるが、バブルとその崩壊によって個人も社会も大きく変わってしまったという思いは、多くの人に共通するものである。安心、安全、安定。戦後のある時期には当たり前と思われていたものが、平成の時代に次々と失われていった。

人と人のつながりも希薄になった。本書に登場する派手な接待も、週末の社員旅行も過去のものとなりつつある。証券取引所から場立ちが消え、外国為替取引も電子プロキングが主流となつて、市場から喧嘩と賑わいが消えた。束縛がなく効率的だが、どこか無機質な社会が出現した。

本書を読んでいるうち、評者はふと原武史『滝山コミュニティ一九七四』を思い出した。所沢と同じく西武線沿線の街、東京都東久留米市の団地とそこにできた公立小学校を舞台にした物語だ。

この小学校で展開された集団主義的な教育を忌み嫌った原少年は、その環境から逃れられべく、私立の中学校に進学する。だが、それから30年ほどの歳月を経て、滝山団地と「七小」を訪れた著者は別の思いを抱く。みんなが連帯すれば1つになれるということ、を素直に信じられた時代の人々の思いが、滝山団地と七小の共同体に投影されていたのではないかと。

笹子が勤めた銀行のことを振り返る時に垣間見える思いは、原が抱いたアンビバレントな思いとどこか似ている。

本書を読み終えた今も、日本が誰に盗まれたのかという問いへの答えはまだ見つからない。私たちは平成の間に、日本という国をどこかに置き忘れてきてしまったのかもしれない。

